


管弦楽とコーラスによる
ふるさと賛歌コンサート



2002年11月17日(日) 14:00

倉敷市民会館

 エネルギア 文化・スポーツ財団助成事業
主催 / 倉敷市・倉敷市文化連盟

ごあいさつ



倉敷市長 中田 武志

文化の香り深い今日のよき日に、管弦楽とコーラスによる「ふるさと賛歌」コンサートが開催されるにあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

この度のステージは、倉敷を代表するオーケストラの倉敷管弦楽団と倉敷男声合唱団、倉敷コール・クライネを軸に構成された一般参加型の「ふるさと賛歌合唱団」がジョイントするというもので、まさに、倉敷市文化連盟ならではの楽しい顔合わせが、実現することになりました。

本市では、「住み続けたいまち 倉敷」の実現を目指し、文化行政に力を注いでおりますが、多彩な芸術文化事業の開催に加え、市民皆様の主体的な文化活動が展開されますことは、豊かな市民文化の振興にとって、大きな推進力になるものと考えております。

こうしたことから、このような趣向を凝らしたプログラムが行われますことは、本市の文化創造に個性と厚みを加えるものであり、その実現のため多大なご尽力を賜りました関係皆様方に対し、深く敬意を表する次第であります。

どうか、ご来場の皆様には、時間の許す限りごゆっくりと秋の日のひと時をこの夢の競演でお楽しみいただきたいと思います。

終わりにあたりまして、本日のコンサートのご盛会と皆様方のますますのご発展を祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます。



倉敷市文化連盟会長 室山 貴義

空の色にも、肌にもふれる冷気にも、深まりゆく秋を感じます今日、ここ倉敷市民会館で管弦楽とコーラスによる「ふるさと賛歌」と銘打った演奏会を開催できますことを、この上もなくうれしく思っております。

170を超える加盟団体がそれぞれ多彩な催しを繰り広げる文化祭の中にあつて、連盟自体が企画し手がける「文化祭中心行事」を、毎年いくつか取り上げるようになって、今年でちょうど十年。その記念すべき年に、本市の誇る倉敷管弦楽団と倉敷男声合唱団、倉敷コール・クライネを中核とする「ふるさと賛歌」合唱団が同じステージをつくるということは、きわめて意義深いことと申せましょう。

そして演奏曲目も、すべて地元をテーマとしたオリジナル曲ばかり。これも本市の文化水準を語る一つの事例として、特筆していいことではないでしょうか。

ともあれ、記念曲、委嘱曲として「その時」を彩ったこれらの曲が、本日の演奏会で再び生命を吹き込まれ、お聴き下さった皆様の胸に、美しい余韻を残してくれましたら、主催者としてこれに過ぎる喜びはありません。

プログラム

作詞／室山多香史 作曲／熊澤住子

女声合唱組曲『倉敷の四季』

指揮／田中 浩 ピアノ／岡田 圭子 合唱／ふるさと賛歌合唱団

作詞／室山多香史 作曲／熊澤住子

男声合唱組曲『高梁川』

指揮／松下 泰久 ピアノ／田中 幸子 合唱／ふるさと賛歌合唱団

作詞／室山多香史 作曲／棚田文紀

混声合唱組曲『瀬戸内海』

指揮／田中 浩 ソプラノ／大森 友美子 ピアノ／三宅 紀子 合唱／ふるさと賛歌合唱団

作曲／團 伊玖磨

管弦楽のための『高梁川』

指揮／菊池 東 管弦楽／倉敷管弦楽団

作詞／室山多香史 作曲／小六禮次郎

交響詩『瀬戸内賛歌』

指揮／菊池 東 管弦楽／倉敷管弦楽団 合唱／ふるさと賛歌合唱団 合唱指揮／田中 浩

プロフィール



作詩者 室山多香史 Muroyama Takashi

本名、室山貴義。倉敷市の市長公室長、市民局長、助役など歴任の後、平成3年に倉敷市を退職。現在、倉敷市文化連盟会長。若い頃から作詩を手がけ、吉永小百合、大月みやこ、中村晃子などレコード作品多数。「代官ばやし」、「OH! 代官ばやし」などのほか、校歌、園歌も多数にのぼる。倉敷市在住。



作曲者 熊澤住子 Kumazawa Sumiko

東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。作曲を長谷川良夫、北村昭、小林秀雄、三枝成彰の各氏に師事。

現在、ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科助教授、中国短期大学音楽科非常勤講師。今回のプログラム以外に主な作品として、女声合唱組曲「可愛い仲間たち」、クラリネットとピアノのための2つの小品、高田敏子詩集「にちよう日」より3つの歌曲などがある。岡山市在住。



作曲者 棚田文紀 Tanada Huminori

東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に入学。作曲、管弦楽法、ピアノ伴奏の全科を首席で卒業。現在、作曲家、ピアニストとしてフランスを中心に活躍中。「フルートソロのためのF」ほか作品多数。



作曲者 團 伊玖磨 Dan Ikuma

東京音楽学校卒。諸井三郎、山田耕筰の各氏に師事。オペラ「夕鶴」、「ひかりごけ」、管弦楽曲「シルクロード」など、歌劇、交響曲、合唱曲、歌曲、劇音楽などで作品多数。音楽のほか随筆「パイプのけむり」は有名。

芸術院会員、文化功労者であったが2001年5月死去。



作曲者 小六禮次郎 Koroku Reijiro

岡山県立操山高等学校卒、東京芸術大学音楽学部作曲科卒業後、服部克久氏の事務所所属し、直ちに第一線の作曲家、編曲家としてデビュー。現在まで映画音楽・TV・ミュージカル・ステージ・CD・CM音楽・イベントと幅広く多方面にわたって活躍中。最新作ではNHK連続テレビ小説「さくら」が好評だった。また、良き伴侶である女優の倍賞千恵子さんと、二人だけで過ごす歌とお喋りのステージも人気である。1991年から東京音楽大学映画放送音楽コース客員教授としても教鞭を執っている。

プロフィール

指揮者 菊池 東 Kikuchi To

昭和23年倉敷市玉島生まれ。5歳からヴァイオリンを始める。広島大学工学部卒業後上京し、東京都民交響楽団のサブコンサートマスター、モーツァルト室内管弦楽団のコンサートマスターなどを経験し、昭和48年帰岡。昭和49年仲間と共に倉敷室内管弦楽団（現倉敷管弦楽団）を創設。以来現在まで28年にわたり同楽団の常任指揮者として、交響楽・管弦楽曲を中心に、バロック音楽から映画音楽・ミュージカル・オペラと幅広いレパートリーで各地で演奏会を開催。今年は1月玉島において1,000人の第九演奏会、3月倉敷音楽祭でオペラ「夕鶴」を指揮し好評を得る。また、ヴァイオリン奏者としてリサイタルのほか、倉敷音楽協会などの演奏会でソロ・室内楽の演奏活動も続けている。倉敷音楽協会会長、倉敷市文化振興財団評議員。



合唱指揮者 田中 浩 Tanaka Hiroshi

岡山大学教育学部音楽科卒業。故榎本辰郎、故水野康孝、金光武義、近藤安介の各氏に師事。コスモスコラス、川崎製鉄水島混声合唱団を指揮して、全日本合唱祭、全日本ママさんコーラス大会、全日本合唱コンクールで活躍。倉敷音楽祭においてオラトリオ「森の歌」「メサイア」オペラ「魔笛」の合唱指揮。1980年から倉敷コール・クライネの指揮者として現在に至る。岡山県合唱連盟相談役、倉敷男声合唱団指揮者。



合唱指揮者 松下 泰久 Matsushita Yasuhisa

上智大学文学部卒業。在学中上智大学グリークラブに在籍し、北村協一、外山浩爾、大久保昭男の各氏の薫陶を受け、男声合唱の楽しみを深める。倉敷男声合唱団の創立当時のメンバーの一員。高梁高等学校や現在の勤務校岡山芳泉高等学校でも合唱部の指導にあたる。



ソプラノ 大森 友美子 Omori Tomoko

東京声専音楽学校教員養成科卒業。同オペラ研究科修了。依田喜美子、矢部礼子、古賀恵美子の各氏に師事。藤原歌劇団、東京室内歌劇場などの合唱出演後、オペラ「泣いた赤鬼」のナレーター役でデビュー。オペラ「魔笛」「こうもり」「ワカヒメ」「ラ・ボエーム」「バラの騎士」ほか、数多く好演。また、倉敷市交流事業でクライストチャーチ大聖堂にてリサイタルを、'02年2月ソプラノリサイタルを開催。その他、合唱ソリスト、指揮者及びヴォイストレーナーとしても活躍している。中国二期会、日本ロッシーニ協会各会員。



ピアニスト 岡田 圭子 Okada Keiko

中国短期大学音楽科ピアノ専攻卒業。田中浩、諏訪江美子、西光千代子の各氏に師事。川崎製鉄水島混声合唱団、コスモスコラスの伴奏者をへて1980年から倉敷コール・クライネ、1996年から大高小学校育友会コーラスクラブの伴奏者として現在に至る。声楽、器楽の伴奏者としても活動している。



ピアニスト 三宅 紀子 Miyake Noriko

国立音楽大学教育音楽科I類専攻卒業。渡辺三和子、片岡靖江、清水淑子の各氏に師事。平成2年から倉敷コール・クライネの伴奏者として現在に至る。現在、トップアートプロジェクト派遣奏者。



ピアニスト 田中 幸子 Tanaka Sachiko

くらしき作陽大学音楽学部音楽学科卒業。ピアノを吉川由三子、阿部英雄、和田晴子、室内楽を西畑正三の各氏に師事。1998年7月から倉敷男声合唱団ピアニスト。



ふるさと賛歌合唱団



2001年3月、倉敷音楽祭において「倉敷メサイア合唱団」によるヘンデル作曲「メサイア」全曲の演奏会がありました。これは「倉敷コーラル・クライネ」「倉敷男声合唱団」「くらしき作陽大学室内合唱団」を中心に、各団員が声をかけ合い120人が集まりました。そして3年がかりで仕上げた大合唱でした。演奏後のお客様の評判や、歌った団員たちの反応は大変好評で、倉敷での合唱演奏としては画期的ともいえるものでした。一緒に演奏した大阪テレマンアンサンブルのメンバーから「機会があればぜひ、また一緒に演奏したい」という話も出ました。打ち上げの時も「これを機に2～3年に1回くらいはオーケストラと一緒に歌いたい」という声があちこちから聞こえました。

それが伏線となり、今回、倉敷管弦楽団との共演が実現し「ふるさと賛歌合唱団」の誕生に至りました。

Soprano

石川 須美	上杉 理恵	上田美恵子	岡井 繁子	岡田 圭子	岡田 道子	小川美智子	小野 朱美
河合 裕子	柏野 綾子	柏野 浩子	川西 孝依	小林 美香	佐藤 則子	清水 幸子	清水 淑子
鈴江 晃子	高瀬喜久子	田中 清子	谷口 照子	土倉小夜子	戸田直美江	中西 恵子	長山 薫
西 かお梨	西山 順子	林 美行	原 秀子	原 芳子	比嘉 孝子	日高 志保	藤井真由美
藤田美津子	松三 聡子	三宅 信子	宮部 幸恵	山本 道子	横田 啓子	吉永ゆり子	和田 展子

Mezzo Soprano

秋岡 智恵	石原 伸子	大垣由紀子	奥野 彩	小田美喜子	小野 敦子	小野 雅子	倉山恵美子
神崎 節子	木村 道子	黒岡美恵子	白神 政子	高田 幸子	田邊枝里子	壺内真奈美	西村 芳枝
野添佳代子	三好 敦子	行安 美紀	吉井 澄子	吉田しをり	吉原 文子		

Alto

天本 由美	内田美代子	内海 敦子	大賀 悦子	岡 公子	小川 友美	荻田 昭子	奥田 昱枝
加藤 祥子	河手 光江	北野 君江	草加 裕子	黒住美智子	白神 明恵	白神 由紀	高杉 純
高橋 恵子	田中 克子	田中 幸子	谷山 瑞穂	塚本 志穂	時広未優紀	豊田のぶ子	新沼 正子
兒子 俊子	野上かね子	信清 靖子	畑 寛子	樋口 照子	藤田真理子	藤原 昌子	平間多喜子
堀内加津子	宮廻貴己子	水谷 知子	三宅 紀子	村田真理子	村中 式部	力武 京子	若林 ユリ

Tenor 1

石井 義明	植田 紘貴	内田 毅	小野 善隆	田辺 省二	中西 昭二	西山 隆幸	野口 一郎
守屋 俊宏							

Tenor 2

池田 進一	越智 健太	柿本 幸徳	佐野 文秀	武井 宏	種田 光洋	中武 一夫	西 功
別府 猛	吉田 精二						

Baritone

天本 隆士	石井 保明	内間 良彰	岡崎 彰徳	茅原 隆之	黒木 智文	友重 学	原田 謙一
森脇 英樹	山本 忠嗣						

Bass

阿左見和夫	織田 友和	佐古 雅範	定金 紀雄	洪谷 和彦	高田 智長	田中 浩 辻 一雄
畠山 裕二	原田 一郎	松下 泰久	三棹 義雄			

倉敷管弦楽団



「美しい音色と良いアンサンブルで質の高い演奏を」を合い言葉に1974年設立。82年岡山県文化功労賞、85年倉敷市文化連盟賞を受賞。定期演奏会の客演指揮者に早川正昭氏、フォルカー・レニック氏、堤俊作氏、金洪才氏、佐渡裕氏ら。フルートのジャン・ピエール・ランバル氏。ヴァイオリンのイヴリー・ギトリス氏、アナスタシア・チェボタリョワ氏、和波孝禧氏。ピアノの伊藤恵氏、有森博氏、チェロの岩崎洗氏、オーボエの茂木大輔氏、トランペットの津堅直弘氏、ホルンの松崎裕氏らを招聘。また岡山県内で活躍する音楽家たちとも共演。

演奏曲はバロックから現代曲まで幅広い。オペラでは「魔笛」「フィガロの結婚」「コシ・ファン・トゥッテ」「カルメン」「こうもり」「ヘンゼルとグレーテル」「蝶々夫人」などを演奏。創立10周年記念演奏会では400人からなる第九演奏会、15周年では「三枝成彰with倉敷管弦楽団スーパードリーム・ジョイントコンサート」、20周年ではイヴリー・ギトリス氏、岩崎洗氏との「コンチェルトの夕べ」を開催。倉敷音楽祭にも数多く出演。ミュージカル「11匹のネコ」「温羅と桃太郎」、ワトリオ「森の歌」、「メサイア」、オペラ「ラ・ボエーム」「夕鶴」などを演奏。また、2003年の倉敷音楽祭ではビゼー作曲オペラ「カルメン」(全幕)を演奏予定。

Violin1

阿曾沼和代	岡崎 良弘	中塚えりか	大森 彩子	木村 啓子	出宮 治子	平松 鋭子
藤田 真理	藤原 智洋	柳井 典子	陶山 靖彦			

Violin2

日笠 京子	井上真由美	大村 奈美	岡崎 将丈	樽谷 美幸	平松 綾	荒木 幸治
丸山 博樹	三宅 郁子	村上 節美				

Viola

武本 克己	井上 麻里	松江 靖子	新見 由枝	岩瀬 裕子	中村佳央理	八木原周平
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

Violoncello

栗木由美子	石川 恵子	黒田 正典	田中 光子	田辺 幹夫	須々木竜紀	日野加奈子
西田 毅雄						

Contrabass

本屋敷勝信	羽原 佳子	平松 博之
-------	-------	-------

Flute

坂井 昌子	市瀬 純子
-------	-------

Oboe

西村 生子	瀬尾 祥治
-------	-------

Clarinet

安原 由美	福島 恭子
-------	-------

Fagotto

北村 直也	坂上 仁志
-------	-------

Horn

文谷 功	熊澤 和美	大島 賢治	加藤 友美
------	-------	-------	-------

Trumpet

原田 宗範	山口 裕司	山口 博子
-------	-------	-------

Trombone

樋口 仁	原 健	松尾 浩寿
------	-----	-------

Percussion

影下 明子	羽野 浩二	井上 充隆	畝木真由香
-------	-------	-------	-------

Piano

竹村 知子

女声合唱組曲『倉敷の四季』

作詞／室山多香史
作曲／熊澤 住子

第1章

かすかに かすかに 音がきこえます
水面を叩く 音がきこえます
芽ぶいたばかりの柳
近づいてくる白鳥
小さいのち いとしむように
静かに静かに 雨が降ってます

お元気ですか あなた
とおく離れた あなたを
いとしいと思うようになってから
この町に はじめての春がきました

倉敷は白壁の町
あなたが あのとき
「君のようだね」といつてくれた町
その倉敷にいま 雨が降ってます

第2章

ミン ミン ミン ミン ミン ミン ミン
シャー シャー シャー シャー
シャー シャー シャー シャー

柳のみどりの間から
蝉たちだけの大合唱
ぎらぎら 光る太陽
中橋わたる とりどりの陽傘
あゝ これが 倉敷の夏!

アイスクリーム ほおぼりながら行く
パンツ姿の カップル
リュック背負って ひげ面の汗をふく
外国の若者
ミン ミン ミン ミン ミン ミン ミン
シャー シャー シャー シャー
シャー シャー シャー

柳のみどりの間から
蝉たちだけの大合唱

第3章

おぼえてる!? 坊や
おみこしの賑わい 素隠居のうちわ
おぼえてる!? 坊や
千歳樂のかけ声 太鼓のひびき

あれは そこ 鶴形山の阿知神社
秋のお祭りだったのよ
ママもね 坊やが元気で大きくなるように
一生けんめい お祈りしたわ

でも 今は静かでしょう!?
白壁を月が照らして
足もとの萩の露が光って
そこここで 虫が鳴いてて まるで夢のよう

聞いてね!? 坊や
ママがはじめて あなたのパパと
デートしたのも こんな夜だったのよ
聞いてね!? 坊や
(あら!? 泣いちゃうの? いやーね!!)

第4章

ロダンの像に 粉雪が散って
小さな生垣に 寒椿が咲いて
美術館はいま ひっそりとたたずむ
ヒュル ヒュル ヒュル
ヒュル ヒュル ヒュル ヒュル
暮れてゆく西空を ちらっと見やつて
コートの際を立てる
かげのある あの人の人
あゝ これが倉敷の冬!!
宿から洩れる灯りに
人恋しさのつる タぐれ

倉敷は 白壁の町
ユトリロの画のような
淋しさの似合う町
粉雪が散って 寒椿が咲いて
ヒュル ヒュル ヒュル ヒュル ヒュル……
倉敷はいま
倉敷はいま 冬を歌っている

男声合唱組曲『高梁川』

作詞／室山多香史
作曲／熊澤 住子

第1章 高瀬舟幻想

エンヤラホウ エンヤラホウ
エンヤラホウ エンヤラホウ
屏風のように 切り立った岩肌が
天までそそり立つ ここは応嶽(コタダキ)

引き綱曳いて 若者が
のぼってくるよ 船頭径
ここを下って 七日の旅を
重ねて舟は いま帰る

エンヤラホウ エンヤラホウ
エンヤラホウ エンヤラホウ
積み荷はにしん、煙草と、塩と
紙と、油と、酒少々
それよりあるじゃろ 玉島の
女にもてた ええ話

川岸を離れ
舟は出てゆく すべるように
まるできまった 筋書きのように
白無垢の 打ち掛けが
ふるえていたのを見たよ
姉さんの角かくし
下を向いたままだったよ

こんなに嫌がる 姉さんを
おまえはどうして 奪っていくんだ
高瀬舟なんか きらいだ
高瀬舟なんか 行っちゃまえ

こんな明るい 陽差しの中で
こんな美しい 流れの中で
ぼくだけ ひとり 泣いている

雨に煙った 高梁川の
一本えのきの 舟着場
商人たちが 忙しげに
動いて今日も 日が暮れる

威勢がいいのは 食いものせいとか
さすがじゃ 人夫の掛け声じゃ
ヨッ ホッ ヨッ ソレ

ヨッ ホッ ヨッ ソレ
声高船頭さん その気になって
自慢ばなしに 花が咲く
自慢ばなしは そのままでええが
内緒の話は できやせんぞ

物見高いは 近所の子供
早うお帰り 日が暮れる
ヨッ ホッ ヨッ ソレ
ヨッ ホッ ヨッ ソレ

飲み屋の障子に 灯りが点いて
賑わう小雨の 舟着場

第2章 おんちョロちョロ経

—新見地方の民謡より—

深いお山の てっぺんに
きのこのような 寺がたつ
お参りさえも とだえ果て
まわりは一面 草ぼうぼう

里から居ついた ばあさまも
お経が読めぬが 玉に傷
おはぎやお水を 供えても
だまってその手を 合わすだけ

あるとき泊まった じいさまは
気はやさしいが 無一文
宿賃がわりに お経をば
教えてほしいと せがまれた

苦しまぎれに じいさまは
口から出まかせ 大でたらめ
壁からのぞいた ネズミを見ながら
口から出まかせ 大でたらめ

おんちョロちョロ おんちョロちョロ
アナノゾキ ニヒキノネズミガ アナノゾキ
ナニヤラ フシャフシャ ハナサレソウロ
テヲ オアゲナサリマシタカナア
オカエリデ ゴザリマスカナア
マタ、オイデンサリマシタカナア

信心深い ばあさまは
毎晩 お経の 特訓中
折りしも二人の ドロボーが
空き寺ねらって しのび込む

のぞいたとたんに ばあさまが
おん ちョロちョロ おん ちョロちョロ
アナノゾキ ニヒキノネズミガ アナノゾキ

びっくりこいた ドロボーは
ひそひそフシャフシャ 話し合い
続けてお経は ばあさまの
ナニヤラ フシャフシャ ハナサレソウロ

あわてて二人は 手をのぼす
供えたおはぎに 手をのぼす
そのときすかさず ばあさまが
テヲ オアゲナサリマシタカナア

浮き足だった ドロボーの
背中に追い討ち ちョロちョロ経
オカエリデ ゴザリマスカナア

やけのやんばち せめておはぎと
とってかえした そのとたん
マタ、オイデンサリマシタカナア

結局二人の ドロボーは
なにもとらずに 一目散
ばあさま気づかず 一心に
お経を唱えて おりました



第3章 この川にこぼした涙なら

この川にこぼした涙なら
きっと、あなたの 街につく
そんな悲しい 手紙がついたのは
倉敷に秋も深まった 小雨の降る日
知らなかった、ぼくは・・・
そんなにも君を 苦しめていたなんて

浴衣すがたに 編み笠つけて
赤い付け紐 ひるがえし
君は踊ってた 胡蝶をのように

太鼓、三味の音、揺れる紅提灯
ぼくはさがした 踊りの渦の中に君を

あゝ 松山踊りの夜を
どうしてぼくが 忘れよう
あゝのときの君は あゝのときの君は
匂うように 美しかった

この川にこぼした涙なら
きっと、あなたの街につく
手紙を見るたび
胸がせつなくなって
はるかかなたの
君の町を思う、ぼく

第4章 高梁川賛歌

雪の落ちる音が
静かな杉林にひびいて
下の谷の滝に
少しだけ 陽差しがこぼれて
花見山は、いま 春を迎える
長かった冬の眠りは
おまえに どんな夢を見せたのだろう
おまえに どんな力を与えたのだろう

熊笹が わんぱくのような顔をのぞけて
歌いはじめた せせらぎに
聞き耳を 立てる

水の清らかさ 自然の美しさ
この川は どこも見どころ
春、夏、秋、冬、いつもシーズン

アテツマンサクの あざやかな黄色
陽差しにふくらむ ネコヤナギ
ヒトリシズカに 備中あざみ
花にひらひら コムラサキ

水の清らかさ 自然の美しさ
この川は どこも見どころ
春、夏、秋、冬、いつもシーズン

やわらかな陽差し
いっぱい浴びて
四つ手にはねる
白魚のかがやき
春が来たんだね 河口にも
水ぬるむ季節が来たんだね 今年も

田畑うるおし 街をうるおし
この水島に 力与えて
長い旅を終えた 清き流れよ

高梁川、高梁川、高梁川
大いなる生命はぐくむ 清き流れよ
母なる川よ

混声合唱組曲『瀬戸内海』

作詞／室山多香史

作曲／棚田 文紀

第1章 瀬戸内幻想

闇の夜も月の夜も 素振りさえ見せず
ただ黙し 息を殺す 島々
ひそやかな 風の音
ひそやかな 潮の香
時はいつ? この海はどこ?
舳先に立ちし 黒き影
猿のごとき 身のこなし
おお 備後の島々
勇名とどろく 村上水軍

岩を噛み 音たてて 白波がさわぐ
ただ立ちて 顔を伏せる 島々
血ぬられし できごとよ
血ぬられし 月影
時はいつ? この海はどこ?
我が子を斬られ 泣き叫ぶ
藤戸の浦の 老いし母
おお 笹無山とて
伝わる恨みよ 源平合戦

茜さす西空を 海原に映し
ただ熱く 涙こぼす 島々
水底の すすり泣き
水底の ゆらめき
時はいつ? この海はどこ?
船から飛びし 幾十の
十二単衣の あでやかさ
おお 幼なき帝と
さだめ分かちし その名壇ノ浦

人の世の 移ろいも
人の世の 移ろいも 争いも見せず
ただ白く 霧がつつむ 島々
瀬戸内の 島よ

第2章 銀のつづら

稲田浩二編「岡山の民話」より

本庄 帆網の 籐十郎
児島きっての 網元さん
大漁旗を なびかせて
港は今日も 大にぎわい

ヤレ カカモンタ (妻よ戻ったぞ)
エエシヨ エエシヨ エエシヨ
ヤレウオンヤ ウオンヤ
オンユウイ オンユウイ

この幸せは ほかでもない
み仏さまの お恵みじゃ
信心深い 籐十郎
そっと 港で 手を合わす

ある日 ひとりで 沖釣りに
いつかたそがれ あかね空
籐十郎は うとうと
まどろみかけて おりました

うつつか夢か 笛の音に
乗って近づく 朱の舟

おどろく顔に にこやかに
稚児がほほえみ かけました

思わず知らず 籐十郎
頭を垂れて おりました おりました

「銀のつづらは み仏の
おほめのしるしじゃ さしあげる」
稚児が言葉を 続けます
「途中で開けては なりませぬ」

月の光に きらめいて
銀のつづらは 夢のよう
教えを忘れ 籐十郎
思わず蓋を あけました

つづらの中は 黄金いろ
大判小判の 数知れず

おったまげたは 籐十郎
みなに知らせに 走ります

たちまち村は 大さわぎ
塩生浜は 人だかり 人だかり

下男につづいて 得意げに
のぞいた籐十郎 眼を回す
ギンギラ眼の 龍の主
とぐろを巻いて おりました

正気にもどった 籐十郎
しばし頭を かかえてた
そうじゃもともと 授かりもん
海へお返し するがええ

ぎっちり沖へ 漕ぎ出して
波の間に ザンブリコ
後を見ずに 逃げ帰り
浜でふるえて おりました

いつしか夜明けた 塩生の
なぎさの静けさ 美しさ 美しさ

朝日にかがやく その朝の
なぎさはひとときわ きらびやか

それもそのはず 一面に
大判小判の 黄金いろ

それからなぎさは 金浜と
呼ばれるように になりました

本庄 帆網の 籐十郎
児島きっての 網元さん
大漁旗を なびかせて
港は今日も 大にぎわい
ヤレ カカモンタ
エエシヨ エエシヨ エエシヨ
ヤレウオンヤ ウオンヤ
オンユウイ オンユウイ

第3章 島に生きる

まだ明けきらぬ 島の 小さな港
ボンボンボン ボンボンボン
エンジンの音が ひびき始める

「今日はべた凧 ぎょうさん釣るぞ」
しわを刻んだ 老いた漁師の顔に
明るさが おどる

屏風のような 石の壁
ハッパの終わった 石切場
カチンカチンカチン
カチンカチンカチン
ぶち込むノミの 音がこだまする

「赤提灯で いっぱいやるか」
額の汗をぬぐう たくましい男
夕陽に光る タオル

はや暮れそめた 島の 小さな港
ザーザーザー ザーザーザー
近づいたフェリー 人が鈴なり

「今日は隆が 試合に勝った」
笑顔こぼれる 白いセーラ服に
青春が ひかる

気になるテレビ 切らされて
食卓かこんだ 子どもたち
コトコトコト コトコトコト
漬もの刻む 音が終わった

「父さん早く 帰るといいね」
お肉の乗った皿に ちゃぶ台の上に
やさしい母が 匂う

第4章 瀬戸大橋賛歌

黄金いろに 海を染め
朝日が昇る いま 昇る

照らせ朝日よ 心おきなく
照らせ朝日よ
空を支えた 巨大な橋を

昔 夢みた 人々の 笑顔が見える
あの日夢見た 人々の 声がきこえる
そう呼んでたね 「夢の架け橋」

十年の歳月を経て 今、ここに
一兆の巨費を投じて 今、ここに

歌おう友よ 瀬戸大橋のために
歌おう友よ 手を取り合って

仕事手がけた 人々の 苦労が見える
それに耐えてた人々の 声がきこえる
そう呼んでたね 「夢の架け橋」

雨風も悲しみも越え 今、ここに
人々の英知集めて 今、ここに
歌おう友よ 瀬戸大橋のために
歌おう友よ 肩くみ合って

この歓びは 誰のもの
この雄叫びは 誰のもの
海をゆく白い舟に 大声で叫ぼう

新潮かおる海 今も
光りきらめく海 今も
美しき 瀬戸の内海
美しき 瀬戸の大橋

この国土 今ぞ一つに
結び合う 本州、四国
伸びてゆけ岡山 要たれ倉敷
おゝ はばたける 大鷲のごと
要たれ、倉敷
はばたける はばたける
大鷲のごと

交響詩『瀬戸内賛歌』

作詞／室山多香史
作曲／小六禮次郎

白い霧がつつむ 島のかなたから
ひそやかにしのび泣く 声が聞こえる
ル・・・・ル・・・・
あれは、とおい昔 この海で散った
源平の人びとの 魂の歌か

白い霧がつつむ
白い霧がつつむ 瀬戸の島々

陽がのぼり いつか霧もはれて
目にしみる海の青 島々の緑
ポンポンポン ポンポンポン
漁に出た 老いた漁師たちの
糸たぐる二の腕に 逞しさが躍る

目にしみる海の青
目にしみる海の青 島々の緑

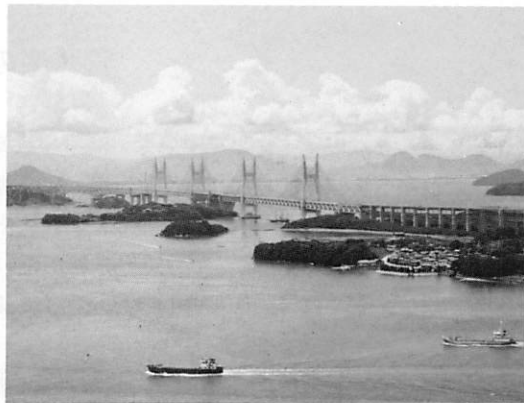
島を縫い 空を支えて
ひとすじに伸びる 巨大な橋よ

「夢」と呼んでた 虹の架け橋
「虹」と呼んでた 夢の架け橋
人びとの 汗と涙が
いま、ここに光る 世紀の事業

人びとの 夢を叶えて
いま 結び合う 本州四国
燦たり、その名 瀬戸大橋
たたえよ、その名 瀬戸大橋

おお、新潮かおる海
かもめ翔び 波もきらめく

美しき 瀬戸の内海 美しき 瀬戸の大橋



曲目解説

女声合唱組曲『倉敷の四季』

作詞／室山多香史 作曲／熊澤住子

1990年 倉敷コールクライネ創立10周年記念曲。倉敷川畔（美観地区）を舞台に、春、夏、秋、冬それぞれの表情を叙情的に描いた作品。

この作品について、熊澤先生は次のように語っておられます。

『倉敷の四季』の作曲の時は、室山先生の倉敷に対する穏やかな中にも強い想いに、何とか応えられる曲をつけたいというプレッシャーの中で書いたように思います。（倉敷男声合唱団創立10周年演奏会パンフより）

男声合唱組曲『高梁川』

作詞／室山多香史 作曲／熊澤住子

1995年 倉敷男声合唱団創立10周年記念曲。

第1章では「高瀬舟」が活躍していた頃の三つの光景を幻想的に描き、第2章では新見地方のコミカルな民話を描き、第3章では高梁の女性と倉敷の男性の恋を「松山踊り」の思い出とともに描き、第4章では源流部から河口までの「高梁川」を真正面から描いた賛歌として描いた作品。

作詞の室山先生はこの作品について、次のように語っておられます。

「高梁川は子供の時からなじんだ川で、作詞のご依頼を受けた時、私はすぐにも書けそうな気がしました。しかし、どうせなら、見たことのない源流部を見た上で書きたいと、ある日、辻さん（倉敷男声合唱団員）の車で下見に出かけました。季節はちがっても、雰囲気はつかめたと思います。民話や高瀬舟時代のことは図書館で調べました。あとは、私の思いの中の高梁川がベースです。熊澤先生の佳曲と団員の方々の熱唱を得て、この詩が皆さんのお心の琴線にどう響くか、楽しみです。」（倉敷男声合唱団創立10周年演奏会パンフより）

混声合唱組曲『瀬戸内海』

作詞／室山多香史 作曲／棚田文紀

1988年 瀬戸大橋の完成を記念して、倉敷音楽祭実行委員会が企画した2作品の一つ。

同年9月、小山裕章氏指揮で初演。

第1章では、村上水軍、源平悲話などを幻想的に描き、第2章では児島塩生に残る民話をユーモラスに描き、第3章では島の人々の生活を、そして第4章では「瀬戸大橋」の完成を祝い讃える歌として描いた作品。

管弦楽のための『高梁川』

作曲／團 伊玖磨

1978年 倉敷市自主文化事業協会、高梁川流域連盟が團伊玖磨氏に依頼した作品。

同年、倉敷室内管弦楽団（現倉敷管弦楽団）により初演。

團氏は、作曲依頼を受けて流域を歩き、「まず私をとらえたのは川の美しさと気品であった。」そして、「流域の人々との密接なつながりが印象に残った。」と述べられたという。曲は二つの楽章にわかれ、第1楽章では「流れ、歌、踊り」の副題を持ち、第2楽章では「備中子守りうた」による変奏を伴う幻想曲とされる。

交響詩『瀬戸内賛歌』

作詞／室山多香史 作曲／小六禮次郎

1988年 瀬戸大橋の完成を記念して、倉敷音楽祭実行委員会が企画した2作品のうちの一つ。

同年3月、瀬戸大橋博覧会の初日に会場内ステージで作曲者の小六氏指揮、第2回倉敷音楽祭前夜祭として倉敷市民会館で菊池東氏指揮、いずれも倉敷管弦楽団と倉敷音楽祭合唱団の演奏。